

# 初期キリスト教の宗教的寛容と logoi sofwh の影響性

田代 英樹

## 序

新約聖書学というミクロな文献学の分野で「宗教的寛容」というテーマを扱うことは困難を伴う作業である。なぜなら新約聖書学では福音書や書簡中のわずかな単位、例えば「アポフテグマ」「奇跡物語」「洗礼伝承」「聖餐伝承」などを取り出して、語句や文体の詳細な検討をしていくので「宗教的寛容」という大きなテーマは扱い難いからである。よって今回は新約聖書に収められた文書が書かれた時代、すなわち新約聖書<sup>2</sup>文書中、最古の書簡であるテサロニケの信徒への手紙<sup>1</sup>が執筆された紀元<sup>5</sup>年頃から最後期に成立した牧会書簡(テモテへの手紙<sup>1</sup>, II、テトスへの手紙)<sup>2</sup>が執筆された<sup>2</sup>世紀前半—その時代には紀元<sup>9</sup>年頃に執筆されたクレメンスの手紙<sup>3</sup>など使徒教父文書と一部時代が重なるが—までを扱いたい。新約時代は原始キリスト教から正統的キリスト教を自認する初期カトリシズムへと移行していった時期である。初期カトリシズムとはクレメンスの手紙<sup>1</sup>や紀元<sup>10</sup>年頃書かれたイグナティオスの<sup>4</sup>書簡に典型的に確認され、後のカトリシズムを決定づけるキリスト教である。例えば、監督(司教) 長老(司祭) 執事(助祭)という階層的教職制度を確立して制度的に教会の一致をすすめ、聖礼典と使徒伝承を重視し、キリスト-使徒-監督という使徒継承の思想を持つ(1クレメンス<sup>4</sup> 12 イグナティオス・マグネシア<sup>7</sup>: 1B1、<sup>1</sup>ポルユカルポス・フィリピ<sup>6</sup> 3、つまりは「<sup>1</sup>つの(□)・聖なる(□□□□)・使徒的な(□□□□)」救いを保証する制度を持ったキリスト教である。初期カトリシズム成立以降「異端」(airesij)と呼ばれる様々なキリスト教分派が正統教会から排除され、異な

<sup>1</sup>テサロニケの信徒への手紙<sup>1</sup>の年代決定の根拠として、使徒行伝<sup>18</sup> 12以下でパウロはアカイヤ州の首都コリントに「<sup>1</sup>年<sup>6</sup>月」留守りその間にユダヤ人によりアカイヤ州総督ガリオの法廷に訴えられたことが記されている。<sup>2</sup>世紀初頭にデルフォイで発見された「ガリオ碑文」の内容からガリオが<sup>5</sup>年春~<sup>2</sup>年春までの間総督の地位に就いていた事が判明した。テモテがテサロニケの教会からの良き知らせを持ってコリントに戻った事に感謝してパウロはテサロニケの信徒への手紙<sup>1</sup>を執筆したので成立年代は<sup>5</sup>年頃となる。

<sup>2</sup>牧会書簡は紀元<sup>10</sup>年以前に用例の見出せない語を多く用いている。一方で牧会書簡にはイグナティオス(<sup>10</sup>年没)の書簡に見られるような、監督と中心とする職制がまだ十分に根付いていない事から(テモテ<sup>3</sup>以下)職制の地域差も考慮して<sup>10</sup> 13年頃に成立したと考えられる。

<sup>3</sup>古代教父エイレナイオスの証言によれば、クレメンスという人物はペトロを継いだ三代目のローマ司教であるという。(『異端反駁』<sup>33</sup>ローマ司教であるクレメンスがコリントの教会に送った書簡で<sup>1</sup> 15「迫害が終わったばかり」という記述があることからドミティアヌス帝のキリスト教迫害が<sup>2</sup>年なので成立年代は<sup>9</sup>年頃と推定される。

<sup>4</sup>アンティオキア教会の監督。トラヤヌス帝治下の迫害において捕らえられローマに護送され殉教した。その護送の最中に各教会に宛てて<sup>7</sup>通の手紙が書かれている。

る信仰・異なる解釈が正統教会では禁忌となる。これは一つの価値観しか認めず、自己と異なる信仰を排除乃至は弾圧するという後のキリスト教が犯した宗教的に寛容な行為の発端であるといえよう。

以上のことから論者は宗教的寛容が失われた原因である初期カトリシズムの萌芽が新約時代において、いつ・如何にして現れたのかを考察したい。具体的にはQ資料（イエスの言葉を集めた一種の語録）に代表される「知恵の言葉」とその担い手が初期キリスト教の神学思想形成（終末論・復活論・キリスト論・グノーシス的異端の誘発）に多大な影響を与えている。新約諸文書のうちパウロ書簡、第二パウロ書簡、牧会書簡の中に「知恵の言葉」乃至はその語録の担い手が主張したキリスト論が伝承史的に確認され、おそらくその起源は後期ユダヤ教の知恵文学、とりわけエジプトのアレクサンドリアで発達したヘレニズムユダヤ教に由来するものと思われる。よってパウロ書簡、第二パウロ書簡、牧会書簡に確認される「知恵の言葉」とキリスト論を、年代的、相互的に検討する必要があるが今回はパウロ書簡に限定してその影響を考察し第二パウロ書簡、牧会書簡は次回の課題としたい。

## 1 Q資料

Q資料とはマタイ、ルカといった福音書の書記者たちによって用いられたとされる仮説上の文書である。マタイ、マルコ、ルカの三福音書間には文体・語彙・語順・文章構造の点でかなりの類似性が見られ、古代よりエウセビオスの『カノン』やアウグスティヌスの『諸福音書の調和について』において指摘されてきた<sup>5</sup>この三福音書間の文学上の関係と、内容・語彙の一致点及び相違点、物語の順序類似をいかにして説明するかという課題を共観福音書問題という。つまりは、マルコのほぼ全資料がマタイ及びルカに用いられており、マルコにおける<sup>6</sup>6節中、その<sup>60</sup>60節以上がマタイに、<sup>30</sup>30節以上がルカに見出される。また、マタイ及びルカにはマルコには見出されない約<sup>20</sup>20節の並行箇所があり、これらの節はイエスの語録や説教から構成されている。これらマタイ・ルカに共通する約<sup>20</sup>20節の並行箇所ではかなりの逐語的一致が見られ、語録・説教が両テキストに同じ順序で出てくるのである。もし、この並行箇所が口伝によるのであれば両者の伝承はばらばらになっており逐語的一致は在り得ないこと、両テキストの伝承配列の順序が並行していることからマタイとルカがマルコの他に用いた共通の資料は文書化されていたと推定され、このイエスの言葉を集めた一種の語録資料をQ資料乃至は言葉福音書Q<sup>7</sup>と呼ぶ。

<sup>5</sup>ただし、エウセビオスもアウグスティヌスも正典諸福音書の比較・対照表を揚げたのみで福音書間の一致点と相違点を問題とは見なさなかった。

<sup>6</sup>共観福音書とはJ.J.グリースバッハが1774年に出版した『共観福音書対観表』( )において初めて共観福音書(sun 共に oyomai 見る )という用語を用いたことに由来する。彼は三福音書間を互いに並列させて刊行し、その相違点と一致点を明らかにした。

<sup>7</sup>Qとはドイツ語の「資料」( )の頭文字に由来する。

Q資料はマタイ、ルカから再構成される仮説上の文書である。よって原典テキストは残存しないが、<sup>44</sup>Q11, 12の箇所引用が（七十人訳聖書）によっているのがギリシャ語で書かれていた。しかし、イエス及びその直弟子たちは基本的にアラム語で語ったと想定されるので、どこかの時点でギリシャ語に翻訳がされたと思われる。それが個々の言葉であった伝承の時点か、一部テキスト化された時点であるか決定はできない。ただしQ資料におけるアラム語の読み間違いと推測できる箇所があり、マタイ<sup>23</sup>では kaqarison「清めよ」、ルカ<sup>11:4</sup> el ehmosunhn「施せ」とあり、ルカの訳は文脈からそれている。この相違は前者はアラム語□□□に遡り、後者は□□□に由来すると考えられ、アラム語の字形の類似のため見誤りが生じ、異なるギリシャ語訳になったと想定される。そうであればQ資料の一部はかなり初期の時点で文書化されていたと思われる<sup>9</sup>。

Q資料の形成時期であるが、研究者の間ではQ資料は一度に成立したものでなく、それぞれの年代において漸時的に成立していったという見解でおおかたの一致をみている。Q資料に紀元<sup>70</sup>年のユダヤ戦争におけるエレサレム神殿崩壊を暗示する記事はない。よって紀元<sup>70</sup>年を上限としユダヤ戦争までには現在の形をとっていたと思われる。問題は下限の設定であるが、一部の研究者の中にはQ資料は紀元<sup>40</sup>年代に成立していたと主張する者もいる。Q資料が紀元<sup>70</sup>年までに部分的編集、その他の付加を幾層にも経て拡大され暫定的に成立していったのであれば、その最古の層は紀元<sup>40</sup>年代に成立していたと見なすことも可能であるかと思う。その理由としてまず、先程のアラム語からギリシャ語への翻訳の読み違いがあるだろう。アラム語を見誤ったため誤訳が生じたのであれば、アラム語を話したイエスの直弟子たち乃至は第一世代のキリスト教徒の年代を想定できるだろう。次にコリントの信徒への手紙<sup>1</sup>にはQ資料及び語録福音書であるトマス福音書と並行する語録が確認できる。

<sup>1</sup>コリント<sup>2:90</sup>にはQ、トマス福音書との並行が見られる。

<sup>9</sup>しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。<sup>10</sup>わたしたちは神が霊によってそのことを明らかに示してくださいました。

<sup>1</sup>コリント<sup>2:90</sup>

<sup>8</sup>ルカ福音書の方がマタイ福音書よりQ資料の元来の順序を忠実に再現していると見られており、Q資料の章・節を引用する時はルカ福音書の章・節をそのまま採用する。よって<sup>44</sup>はルカ<sup>44</sup>となる。

<sup>9</sup>荒井献、中村利夫、川島貞夫、橋本滋男、川村輝典、松永晋一、「総説新約聖書」、日本基督教団出版局、<sup>18</sup><sup>19</sup>頁。

3 イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。4 言うておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたのしているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

0 224 ルカ 0 224 マタイ B 167

イエスが言った、「私は目がまだ見えなかったもの、耳がまだ聞けなかったもの、手がまだ触れなかったもの、人間の心に思い浮かばなかったものを、あなたがたに与えよう。」

トマス福音書語録 17

どちらかと言えば1コリント 2 90にはQ語録よりトマス福音書語録 17の方がより並行しているように感じられる。この相違はQ文書に複数の校訂本が存在したことに原因があるかもしれない。例えば 6 22には三つの「幸いだ」の句があるが、マタイでは「幸いだ」の句は 8 になっている。マタイ 5 10の「義のために迫害される人は幸いである」という句はマタイが所属した教会の当時の状況が反映されることからマタイの編集句としても依然両者の「幸いだ」の句には数の違いがある。元来八つあったものをルカが三つに短縮しなければならなかった理由は考えられないのと、マタイにおいても残りの 4の句はマタイ自身が編集したと主張することは困難である。よってルカが入手したQ資料は元来三つの「幸いだ」の句があり、マタイに流れた版では数が増幅されていたと推測される。つまり、マタイとルカは一定の付加・変更がなされたQ資料を別ルートで入手したのであり、Q資料の版や担い手にも多様性があったことが確認される。また、Q資料が一定の時間をへて現在の形になったことは先程述べたが、各年代ごとに伝承が付加され、編集されていったとすれば、当然Q資料には成立年代の層が二つ乃至三つ存在する。「洗礼者ヨハネを話題とする部分」( 3 7: 8)を最古の編集層である編集A、「弟子派遣説教の部分」( 9 5: 2)を編集B、「イスラエルへの審き」を意図した部分が編集Cとされ<sup>1)</sup>、文学的類型では編集A Bが知恵文学的傾向が強く、編集Cは預言書の傾向が強い。(Q資料の類型については後述参照)1コリント 2 90に確認された語録の並行箇所は 0 224なので、知恵文学的編集Bに属する。1コリント 1章~6章においてはコリント教会にもたらされた知恵の言葉の影響で教会員が自己の知恵を誇り一種の霊的な熱狂主義を引き起こしたことが問題になっている。このことからQ資料の中で初期に形成された知恵文学的編集Bとの並行は、両者が知恵と関連していること、 0 224は「イエスは未来的な人の子であるのみでなく、地上においてもすでに人の子であったのであるから、イエスの言葉に対する今の決断！が終末における救いと直結している 2」という終末の到来が間近に迫っているという熱狂的期待を示唆しているので、この語録がもたらされたコリント教会が霊的な熱狂主義に陥ったであろうこと、また年代的にも初期に成立しているという点で合致

<sup>1)</sup> 木田献一・荒井献監修、「現代聖書講座第 2 巻 聖書学の方法と諸問題」、日本基督教団出版局、196 頁。

<sup>11)</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 23 頁。

<sup>12)</sup> 荒井献、中村和夫、川島貞夫、橋本滋男、川村輝典、松永晋一、前掲書 111 頁。

するだろう。I コリント書が執筆されたのはおおよそ紀元 5年の春であるから<sup>B</sup>少なくともこの時期にはQ資料の知恵文学的編集Bと並行する知恵の語録がコリント教会にもたらされていたこととなる。ただし、コリント教会に編集Bと重なる知恵の語録をもたらした担い手はQ資料の担い手とは別系統のグループであろうと思われるが(2章参照) 知恵の語録がかなり初期の時代に成立していたことは コリント書からも確認できたので、Q資料の編集A B層の成立年代は紀元 5年前後、一部は 4年代を上限とすることも可能ではないかと推測される。

Q資料について長年議論されているのが「Q資料はどの文学類型に属する文書なのか」という問題である。現在「知恵の語録集」か「預言書」と捉える二つの見解があるが、決着はついておらず更なる研究成果を待たなければならない。そもそも初期のQ資料研究においてはその文学類型は明確ではなかった。その理由としてQ資料はイエスの生涯にあまり関心を示しておらず、受難物語を含んでいないので伝記と分類するには不完全でありQの文学類型は学者たちにとって想像し難いものであったからである。Q資料をカテキズム的補遺として「マルコによる福音書」を補うために編集された一種の語録集と考え、マルコを補う目的のため、Q資料の著者は受難・復活物語を意図的に省略したと見なすヴェルハウゼンの説など様々な試みがなされたが、その解決の糸口は<sup>□</sup>。ロビンソンによって与えられた。彼はQが一種の語録集であるという視点から、「箴言」、「ピルケ・アポート」、「トマスによる福音書」などの古代における語録集の種類の範囲内でQを大まかに位置付けることを試みた。ロビンソンはこれらの語録集<sup>14</sup>に見出される logoi (諸々の言葉、語録) という共通の呼称を持っていることに注目したのである。logoi という用語はマタイにおいてもイエスの説教を表すために用いられており(7:29, 16:1)、旧約聖書の知恵文学(箴言 3:12, 14:2)においても見出すことが出来、このようなユダヤ教の知恵文学からQ資料、語録福音書トマスに連なる類型をロビンソンは賢者の語録 logoi sofwh と呼んだ。もっともQ資料には預言的、黙示文学的語録が含まれており完全に賢人の語録から成り立っているのではない。そこで<sup>□□</sup>クroppenボルグはQ資料の最古層を「箴言」、「トマスによる福音書」など古代における知恵語録集の関連の中で捉え、典型的には「知恵文学的教示」の書とした。そして、Q資料に確認される預言者的、黙示文学的語録をQ資料が漸次的に発展する中で加えられた二次的なものと見なした。この説は北アメリカのQ資料研究者の間で多くの賛同を得、論者もこの説が極めて合理的と判断するが、一方で<sup>□</sup>シュルツ、<sup>□</sup>ボーリングや国内では佐藤研氏のようにQ資料を預言書と捉える説がある。佐藤氏は『Qに至る伝統の線』を旧約聖書の預言書から引き始め、預言と預言書との鉅脈が

<sup>B</sup>使徒 18:2によれば、ガリオがアカヤの総督であった時パウロはコリントに滞在していたとされている。ガリオの総督としての任期は、ガリオ碑文によれば紀元 51年～52年乃至は 52年～53年と推定される。パウロはコリントからエフェソに行ったのでからのエフェソ滞在は紀元 52年～53年と推定され、コリント 6:8には五旬節までエフェソに滞在すると記載されているので、コリント書の執筆年代は紀元 53年の春となる。

<sup>14</sup>「ディダケー」1:32、「クレメンス」B1:26, 78

「中間時代」(旧約と新約の「中間」という漠たる意味で、ほぼ紀元前三世紀頃から紀元一世紀までを意味する)を経て「隔世遺伝的」に復活したものがQであると捉えた<sup>15</sup>と主張し、その根拠として旧約の預言書にはその預言者の死を報じる記事がどこにもないことから、Q資料に受難物語が無いのは、それが一種の預言書であろうとしているからであり<sup>16</sup>典型的には預言書であると想定する。しかし、Q資料の「生活の座」を考察する時、佐藤氏も認めているように『そもそもQ文書は、長い時間を掛けて生成・拡大して行ったものである。とすれば、既にそこからして一つの「座」に固定することの困難性が予感できよう。<sup>17</sup>』とQ資料を「カテキズム」「宣教」「イスラエル批判」のためなど生活の座をどれか一つに固定しようとしたらほころびが出てくることを指摘している。更に彼はQ資料の編集ABCの各層に異なる生活の座があったことも指摘しており、『Qの「生活の座」は多様であり、それはQ圏内の多様な生活側面と、それらの歴史の変遷とを反映していると思われるのである。<sup>18</sup>』と結論付けている。つまり、Q資料は長い時代を経て漸次的に成立していったので、おおよそ三つの編集層が確認され、それ故に生活の座も多様であり、一つには固定できないということである。ならば、文学類型も同様にQ資料の類型を預言書一つに固定することは困難なのではないかと論者は判断する。なぜなら、Q資料は漸次的に成立していったのであれば当然、文学類型も多様性が出てくると思われるからである。Q資料初期の層を基本的に知恵文学の類型と見なし、Q教団の宣教がイスラエルに受け入れられなかった結果としてQ資料にはイスラエルを断罪する預言者的言葉が増えていき( <sup>19</sup> 12:35 11:22 4:5 13:35 ) 結果として後期の編集層Cが典型的に預言書的性格を帯び、それを歴史的原因による二次的な付加と見なした方がより合理的に思えるからである。ちなみに佐藤氏はQ資料に存在する知恵文学的要素を『旧約以来の預言者的伝統の一部が共に知恵文学に接近した結果である<sup>20</sup>』と理解しているが、預言者ナタンやイザヤも王に助言を与えるという意味で賢者と考えられるし、勝村弘也氏は『イスラエルの知恵は、おそらく預言者運動などと接触しながらゆっくりと成熟していったのである<sup>21</sup>』と指摘していることから知恵と預言者のどちらが接近していったかはここでは論じることはできないが時代が進むにつれて両者とも知恵文学的・預言書的要素を内包するようになったようである。

最後にQ資料の神学と担い手であるが、Q資料においてイエスは人格化された天的知恵と関連付けられており( <sup>22</sup> 7:31:4 ) イエスの受難と復活の物語が無いことから<sup>23</sup> Q資料を作り出したグループ(Q教団)は十字架につけられたイエスではなく、天に挙げら

<sup>15</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 27頁。  
<sup>16</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 27頁。  
<sup>17</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 27頁。  
<sup>18</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 27頁。  
<sup>19</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 27頁。  
<sup>20</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 27頁。  
<sup>21</sup> トマス福音書にも受難物語は存在しない。

れたイエスは神の威光と全権とを授けられた者と見なされ( 102) イエスが現在も「活ける者」であり、万物を支配するイエスと共に現在において生きるという「被拳キリスト論」的な理解をしていたと推測される。ヘレニズムユダヤ教においても天的知恵が人間世界に降下し受け入れられず被拳(上昇)するというモチーフが見られ(2) 同様にグノーシスにも原人・救済者が人間の姿をとって天から降下し、地上で自らを啓示したのち、天に上昇するという表象が確認される(3) よってロビンソンはユダヤ教知恵文学におけるソフィアの実体化と後の二世紀になって体系化されたグノーシス的救済神話の間を結ぶ鎖の一つがこのようにQ資料の中に存在するとし、Q資料の担い手、1コリント書の背後にいる論敵、ポリュカルポスによるピリピ人への手紙の背後にいる論敵(4) トマス福音書の担い手の間に、密接な伝承史的関連があったとする(5) 確かに先程 1024 1コリント 2:90 トマス福音書語録 17には並行する語録を確認できた。しかしこのことはQ教団がすぐさまにトマス福音書のようなグノーシス理解をしていたという訳ではない。確かにQ教団は『信仰はイエスの諸々の言葉を信じることとして理解されており、信じるということにより、イエスの告知したことが信仰者にとって現臨するものとなり、かつ真実なものとなるのである(6)』とイエスの生前の言葉はその死で妥当性を失っておらず、聞き手にまさに現臨しながら

2 ソロモンの知恵 314  
3 C. B.

4 ポリュカルポスによるピリピ人への手紙 7:1において

「イエス・キリストが肉体をもって来た者であることを告白しない者は皆、反キリストなのです。また(キリスト)が十字架上で殉教(の死を遂げたこと)を告白しない者は悪魔に属する者なのです。自分の欲望に従って主の言葉(ta logia tou kuriou)をごまかし、復活も(最後の)審判もない、などと言う者は、サタンの長子です。」(荒井献編「使徒教父文書」講談社、198年、29頁)

とあることからポリュカルポスの論敵が「主の言葉」をごまかし、復活を否定したことがうかがえる。このことからロビンソンはポリュカルポスの論敵をこの伝承史的関連に位置付け、コリントの論敵やトマス福音書の担い手などの霊的熱狂主義者及びグノーシス主義者であったと想定する。しかし、ポリュカルポスの手紙には霊的熱狂主義者やグノーシス主義者に特徴的な「現在の終末論」、「リベルティニズムの傾向」が見出されない事から支持できない。また、「主の言葉のごまかし」がマルキオンの恣意的な正典作成を指すと思われること。論敵の神の審判の否定が、旧約の神を新約の神とは異なる神として否定するマルキオンの二神論に一致すること。霊的熱狂主義者やグノーシス主義者に特徴的な「現在の終末論」、「救済理解」が無いにも関わらず論敵が復活を否定していることから、論敵は「霊においてすでに起こった復活」ではなく、仮現論的な復活理解をしたマルキオンの傾向と一致すること。「サタンの長子」という呼称がエイレナイオス『異端反駁』34において報告されているポリュカルポスがマルキオンに向けて使った呼称と同じ事から論敵はマルキオンを指すと推測される。

おしるぐスター( A B)

1970 青野(青野大潮「霊的熱狂主義者の一系譜~第二クレメンスの論敵をめぐる」『日本の神学』8号、1970年、頁以下) 荒井(荒井献「荒井献著作集」岩波書店、2011年、23頁)が指摘するように クレメンスの背後にいる論敵こそが、彼らの「現在の救済論」、「リベルティニズム的傾向」、「トマス福音書との密接な関連」などからこの系統に入れるべきである。

2 青野大潮『Entwicklungslinien durch die Welt des frühen Christentums』1976

3 クロツペンボルグ著、新免貢訳「Q資料・トマス福音書」、日本基督教団出版局、1963頁。

ら語りかけており、聞き手がイエスの言葉を他の人々に伝えること、すなわちイエスの宣教を継続することで高く挙げられた主の臨在を呼び起こすことが出来る、と理解したようである。そのような理解は既に救いを手にしているという現在の終末論を伴い易く、後にグノーシス的解釈の対象となることは事実であるが、Q教団はこの時点ではヘレニズムユダヤ教の知恵文学の枠内に留まりながら自己の神学を形成したのである。

Q資料には異邦人の地へ赴いて伝道をするという発想はない。あくまでも地上のイエスが行なった宣教の継続であるので、伝道の対象はパレスティナにおけるユダヤ人である。佐藤氏は『パレスティナにも異邦人が存在したため、異邦人との具体的な接触が想定されてはいる。しかし、繰り返しになるが、パウロ的な意味での異邦人伝道の視点は存在しない<sup>27</sup>』と指摘しているが、1コリント 2:90に 10:224と並行する語録があり、コリント教会まで知恵の言葉をもたらしたおそらくQ教団とは別系統の担い手が既に 50年代に確認出来、彼らの救済観・世界観がかなりグノーシス化していることは興味深い。(後述参照)

また、Q資料に言及されている地名は大半が北ガリラヤや西シリアのものである。(10:135)特にQ資料は北ガリラヤの町々を熟知しているのでそこにQ教団が存在した可能性はある。彼らの中に預言者が活動していたことは、Q資料が「預言者」にしばしば言及していることから伺えるが、その大半は迫害される者とされているのでQ教団のイスラエルへの宣教は成果を挙げることができなかったと思われる。そのような中でイスラエルの審きを中心とする編集Cの層がQ資料に加えられ『担い手達は失意の中、迫り来るユダヤ戦争を避け、イスラエルの地を棄てて(北方のシリア各地へ?)行った<sup>28</sup>』ようである。そうであればQ教団は複数のグループに分かれてシリア地方に散っていったので、最終的な形態はグノーシス派の文書となる「トマス福音書」(成立地域は東シリアとされている)の成立に何らかの影響を与えた可能性が高い。それは「トマス福音書」は知恵の語録集であり、Q資料同様に受難物語が欠落しておりイエスの死自体に関心がないなどの共通点が見られるからである。

以上、Q資料の形成時期・文学類型・神学・担い手を概観したが、初期キリスト教の神学思想やマタイ・ルカといった福音書の成立に多大な影響を与えており、後のグノーシス的異端を誘発する被挙キリスト論・現在の終末理解を内包していることが確認できた。これまで新約聖書学者たちは初期キリスト教の諸起源を黙示文学的終末論に見出してきたが、もう一つの起源がヘレニズムユダヤ教の知恵文学に由来することがQ資料を分析することで解明され始めているといえよう。

<sup>27</sup> 木田献一・荒井献監修、前掲書 291頁。





解には見られなかった第<sup>4</sup>の解釈が加えられる<sup>3</sup>。それは「受洗者がキリストと共に死んで、共に復活する」というモチーフである。この第<sup>4</sup>の解釈はパレスティナ教会で形成された洗礼理解を超えており、ヘレニズム教団<sup>1</sup>から生まれたものであろう<sup>2</sup>。ヘレニズム世界では、ある神の崇拜者が、儀式を通してその神の運命と結合され、救いを獲得するという理解が広く普及していた。特にヘレニズム密儀教では、密儀を受けるものが聖別を通して、死にそして蘇る祭礼神（アッティス、オシリス、アドニス等）の運命に与ることで新しい命を得ることが出来るとされていた<sup>3</sup>。このヘレニズム密儀教の解釈がキリスト教の洗礼理解にも入ってきたと考えられる。つまり受洗者をキリストの死と復活に結合することにより、受洗者自身がキリストの死と復活に与り、新しい命に復活したというモチーフ（キリストとの共死共生）が洗礼に加わるのである。過去の一度きりの出来事である洗礼が背景なので、元来 apoqnhskw（死ぬ）と suzaw（生きる）は過去の一点を表すアオリスト形の時制で表現され、ヘレニズム教団ではキリストとの共死共生を洗礼時のことと理解しすでに現在の復活を手中にしている、と理解していたと推測されるが、パウロはキリスト者の復活は将来の事という独自の信仰理解から apoqnhskw（死ぬ）はアオリスト形、swzw（救われる）などの動詞は未来形にする習性がある。事実洗礼について述べているローマ<sup>68</sup>は apoqnhskw（死ぬ）はアオリスト形、suzaw（生きる）は未来形となっている。つまり、パウロの信仰理解としては洗礼時に神から救いの保障は与えられるが、完全なる救いと復活は将来のことであり、人はその時まで現実の人生を苦しみ且つ喜びながら生き抜く宿命が課せられているというのである。コリント教会の人々が「霊による復活の先取り」をしたのはパウロの将来の復活という理解を取り違えて復活を現在の的に理解したからであるが、ヘレニズム密儀教の解釈がキリスト教の洗礼理解に影響を与えていれば当然、キリスト教でも洗礼を受けた時点でキリストと共に死に、共に甦ることで現在の復活の命を手中にしたと考えるだろう。また、コリントの地はパレスティナよりヘレニズム密儀教は身近なものであったし、元来コリントの人々もヘレニズム的な概念として信者が儀式に与ることでその神の運命と結合され、現在の救いを獲得するという理解を持っていたと思われる。しかし、コリント教会の設立者はパウロ自身であり、将来の復活というテーマはパウロ神学の中心の一つなのでパウロもこの点は熱心に説明したと想像される。このような誤解はコリント教会の人々が元々儀式を通して現在の救い・神的命の獲得出来ると思っていた故に生じたと考えるよりは、やはり外的な要因が働いた影響で思想的变化が生じたとする方がより合理的に思われる。

ここで問題になるのがコリント教会に「知恵の言葉」を導入した人々の存在である。Iコ

<sup>1</sup> B 18

<sup>1</sup> ヘレニズム教団にもヘレニズムユダヤ人教団、またはアンティオキア教会のようなヘレニズムユダヤ人と異邦人の混合教会が存在した。

<sup>2</sup> B 18

<sup>3</sup> ヘレニズム密儀宗教では、その祭儀に参加することによって、祭儀神格（アッティス、オシリス、アドニス等）の運命「死と再生」に与ることが出来ると考えられていた。

リントの中には、主の語録伝承との関連が多く認められる。1 コリント 13 章において sofial (知恵) は集中的に見出され<sup>34</sup> それに対してパウロは mwria (愚かさ) という語を使って sofial (知恵) を批判している。特に注目すべきことは、これらの批判をするさいに「トマス福音書？」から一つの語録を引用しているのである<sup>35</sup>。パウロは 2:60 において彼の論敵の用語と知恵の語録を借用し、十分に構想を練った上で若干の改変をもって彼らを批判している。6 節の teleipij (完全なものたち) とは論敵の自称と考えられる。ヘレニズム密儀教では密儀に与り、完全な知恵を与えられた人を「完全なもの」と呼んだからである<sup>36</sup>。更に追加すると teleipij は知恵の書 9:6 にも確認でき、同書は旧約の知恵文学の類型に属するのでコンテキストと上手く合致する。よって論敵の思想的背景をヘレニズム密儀教とするよりは知恵の書に求めた方がいいだろう<sup>37</sup>。この文脈でパウロは「完全なもの」とは自分たち～十字架を知恵とするものたち～を指しており、論敵の自己を誇る知恵はこの世の滅ぼされる支配者の知恵であると立場を逆転している。7 節の musthrión (奥義) はパウロ書簡中 8 回の用例のうち 6 回が 1 コリントに出る、apokruptw (隠れた) もパウロ書簡他に用例が無いこと、proorizw (あらかじめ定める) もパウロにはローマ 8:23 にしか用例がない<sup>38</sup>。よって 7 節も論敵の用語をパウロが意味を逆転させながら借用していると見てよいであろう。さらに 8 節に「栄光の主」とあるが、この「栄光の主」という表現はパウロ書簡ではこの箇所のみに出るので論敵の用語と見てよいであろう<sup>39</sup>。そして、あることが論敵の信奉する「栄光の主」を、あることが論敵を支配している「この世の arcwn 支配者<sup>40</sup>」自身が知恵の欠如の為に十字架につけてしまったと皮肉を込めて批判しているのである。その締めくくりとして次の 9:10 で論敵が用いていたと思われる語録(トマス福音書語録 17 に並行)を引用して「しかし、このことは、『目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された』と書いてあるとおりです。わたしたちは神が霊によってそのことを明らかに示してくださいました」と十字架を知恵とするものたちこそが「完全なもの」であるという奥義を神は啓示してくれたのだと、「完全なもの」、「奥義」、「栄光の主」と論敵の用語を借用して皮肉たっぷりに反論していると思われる。このことは 11 節の hmiñ de apekaluyen o qeoj dia tou pneumatoj「そ

<sup>34</sup>パウロ書簡の 17 回中 6 回が コリントに見出され、その中の 5 回が 13 章に出る。  
<sup>35</sup>現在確認されているトマス福音書の最古の写本(オクシリンコスパピルス)は紀元 200 年頃とされており コリント書が執筆された紀元 50 年代には成立していない。しかし、コリント書に引用された語録は後にトマス福音書に編集された可能性は高い。

<sup>36</sup>W. B. Eerdmans, *Mysterienreligionen*, 38; B. Reicke, *Theologie des Neuen Testaments*, 564.

<sup>37</sup>知恵の書がエジプトのアレクサンドリアで成立していることからとも言える。(後述参照)

<sup>38</sup>ローマ 8:23 は伝承である。

<sup>39</sup>Q やトマス福音書におけるキリスト論は天に挙げられた被擧キリスト論であり、十字架の出来事は無視されている。コリント 1:25 などでパウロは「十字架につけられたキリスト」とことさらに「十字架」を強調している事から、論敵が十字架を無視した被擧キリスト論を主張していたと推測されそれにこの「栄光の主」が合致すると思われる。斎藤忠資「第 コリントにおけるパウロの反対者のキリスト論」『基督教論集』第 17 号、1971 年 4 頁。

<sup>40</sup>arcwn は支配者、君主、役人という意味もあるが、コンテキストのヘレニズム密儀教やグノーシス的背景を考慮したら、支配勢力、悪霊の意味が妥当であろう。







で魂だけの完全な状態 gumnoj (裸) になることであった。青野氏も指摘しているように<sup>5</sup> の ekduw はパウロ書簡では コリント<sup>534</sup> しか用いられていないので論敵の語彙であろう。ヘレニズム密儀教では神的「命」を与るさいに神的衣服を「着る」という表象が用いられるが、この箇所では論敵は「着る」ことよりも「脱ぐ」ことを主張している。よって論敵の「脱ぐ」という表象はヘレニズム密儀教以外の出所を検討する必要がある、それはアレクサンドリアのフィロンの著作「巨人」<sup>3</sup> や「夢」<sup>4</sup> に見出される。それに対してパウロは論敵の言う「天における体」を認めつつ、それを enduw 「着る」ことを願っているのだ、地上の体を脱いでも裸の状態にはならないのだ！と反論している。次に gumnoj (裸) という語であるが、ブルトマンは論敵の用いた語彙として「霊としての望ましい状態」を意味していたとするのが妥当としている。その理由として gumnoj の語はグノーシスの文書に地上の swma からの解放された望むべき状態として用いられているとヘルメス選集などを挙げているが<sup>5</sup> 後に体系化されたグノーシスの教義をコリント教会に見出すことはできない。gumnoj の語はフィロンの著作にも確認でき、彼の「アレゴリカルな説明」II では gumnoj は「体を脱却して神に向けられた魂の裸の状態である」とII コリント<sup>15</sup> のコンテクストに合っているし、フィロンの活動時期は前<sup>B</sup> 頃<sup>54</sup> 頃なので時代的にも、コリント書の執筆時期と重なるであろう。フィロンにとっての救いとは「死と共に魂が体から解放され、天上界へと被挙され、体を持たない、裸の存在になること」であった<sup>5</sup>。つまり、パウロの在命中にはフィロンに確認できるように体に対する否定的な見解がエジプト(特にアレクサンドリア)を中心にヘレニズムユダヤ教に存在し、その思想の影響を受けた巡回説教者や知恵の語録の担い手がコリント教会に侵入していたことが確認できるのである。

またII コリント<sup>54</sup> 後半に「脱ぐことを願っているからではなく、むしろ上に着ることを願っているのだからである。死ぬべきものが命によって呑み込まれてしまうためである。」とあるが、フィロンの「逃走と発見」<sup>9</sup> では、祭司ナタブとアビブが、「死ぬべき命を朽ちない命と交換し、生成した世界から生成したのではない世界へと移って行った」と解釈しており、「徳」においても、「モーセは、死ぬべき生から不死なる生へと移行し、統合されていた体と魂が、魂が体を衣のように脱ぎ去ることによって互いに分離し、この世から決別した」とこの箇所との関連が認められる。おそらく論敵は「魂が体を衣のように脱ぎ去ることによって死ぬべき命を朽ちない命と交換し、魂と体を互いに分離することでこの世から決別した」と主張したと思われる。パウロは「体を脱いで裸になるよりも、むしろ上から着ることを主張し、それこそが死ぬべきものが命の呑み込まれるのだ！」とまたもや論敵の主張を逆転させて反論している。そして<sup>5</sup> 節では「死ぬべきものが命の呑み込まれるよう」に働いて下ったのは神であり、神はキリスト者に救いの保障として arrabwha tou pneumatoj (霊の手付金) を与えて下ったが、arrabwh (手付金) が契約保証としての代金を

<sup>5</sup> 青野太潮、前掲書、34頁。  
<sup>6</sup> B, m, 29  
<sup>5</sup> 「ケルビム」<sup>3</sup> 「巨人」<sup>3</sup> 「夢」<sup>4</sup>

意味する商業用語であることから最終的な救いは終末時のことであると、体を脱いで霊の完全な状態である裸になることで終末時の体の復活を否定して、救済を現代的に捉えていた論敵に終末の「いまだ」を提示しているのである。

以上のことからコリント教会にもたらされた知恵の語録及びその担い手にはエジプトのアレクサンドリアで発達した知恵文学とフィロンの思想が色濃く反映しており、アポロがアレクサンドリア出身で聖書学<sup>5</sup>を学んだのなら旧約聖書の知恵文学からフィロンの魂・体などの「二元論」や救われた状態の「裸」の概念、人格化された知恵などの思想に触れる機会は十分あったと考えられるし、パウロが知恵を集中して批判する1コリント<sup>13</sup>章において、アポロの名前が頻繁に言及されることからもうかがえる。また、当時アレクサンドリアとコリントには定期船の航路が確保されており、通商・文化の交流が盛んであったことも考慮されるべきであろう。

## 結論

今回の考察では時代的にも一世紀中葉ということから初期カトリシズムの萌芽を確認することは出来なかった。しかし、そもそも初期カトリシズムが生じキリスト教の制度が整備されていった理由には異端思想から正統教会を守るという意図があった。既に一世紀中頃に後にグノーシス的異端に発展していく萌芽をヘレニズムユダヤ教による知恵文学、Q資料及び知恵の語録、トマス福音書との並行箇所など初期教会の内部に確認することが出来た。キリスト教は我々の想像以上に発足直後から様々なグループが存在し、その神学思想も多様性に富んでいたことがQ教団の中にさえ、版の異なるQ資料を使用していたことから伺える。つまり、キリスト教が発展していく中で数々の亜流を淘汰し、正統を自認し教会を統一しようという動きが生まれてくるのは多様性からの分裂・消滅を避ける為にも必然であったようである。おそらく、カトリック（普遍）であろうという意識がなければキリスト教は世界に宗教には成り得なかったであろうし、今日まで存続も困難であったと思われる。しかし、その中で亜流を尊重するという寛容の精神をどう折り合いをつけるのか？異なる思想同士どう共存していくのか？今日のキリスト教が突きつけられた課題であろう。次回は、Q資料に連なる知恵の語録、及びそのキリスト論を第二パウロ書簡と牧会書簡で検討し、パウロ神学からの変容と初期カトリシズムの萌芽を確認し最終的な結論を導きたい。

（たしる・ひでき 日本キリスト教団西陣教会伝道師）

<sup>5</sup>パウロの時代には現在の<sup>27</sup>文書に纏まった「新約聖書」は存在しなかった。正典として<sup>27</sup>文書が「新約聖書」とされたのは<sup>391</sup>年のカルタゴ会議においてである。よって<sup>1</sup>世紀に聖書といえは旧約聖書を指す。